

CAPEDS事業報告書

スーダン現地プロジェクト

2007年9月



スーダン障害者教育支援の会 (CAPEDS)

【目次】

ハルツーム大学障害学生卒業生の会との懇談会	1
ハルツーム州障害児中核支援校の教師との意見交換会	4
スーダンにおけるブラインドサッカー普及プロジェクト	7

ハルツーム大学障害学生卒業生の会との懇談会

作成者：モハメド・オマル・アブディン

概要：障害を持つハルツーム大学卒業生の会の執行委員会とのミーティング

目的：

1. 会の執行部とハルツーム大学に在籍する障害学生と卒業生が直面しているさまざまな問題について話し合う。
2. ハルツーム障害学生卒業生の会の主な活動について報告を受ける。
3. 今後 CAPEDS と一緒にできる協力について。

1. 会の執行部とハルツーム大学に在籍する障害学生と卒業生が直面しているさまざまな問題について話し合う。

まず会長のナウラニーさん（経済学部卒業生で、社会開発研究所の助手）からハルツーム大学障害学生卒業生の会について話していただいた。これによると、会の登録メンバー数は37名である。障害をもった卒業生の全体のおよそ3分の1に当たると予想される。障害別では、視覚障害者が圧倒的に多く全体の約90%であり、それに次いで、肢体不自由障害者が10%である。



会長、副会長、事務局長のほか、広報担当、アカデミック担当、スポーツ担当、文化事業担当がある。この会の構成メンバーたちは、学生の時に初めて、障害者支援室の必要性を訴えたり、障害をもった学生の会を設立したりと、活動的なメンバーが多い。実際、2005年にハルツーム大学の図書館内に障害者支援室ができたのも、彼らの努力があったからだという。

2. ハルツーム障害学生卒業生の会の主な活動について報告を受ける。

今回のミーティングでは、障害をもった学生や卒業生が抱えるさまざまな問題について報告をうけた。これらの問題をまとめると以下のようなものである。

1. 障害者支援室ができたものの、実際にその部屋に整備された設備は学生のニーズを把握していないものだった。
2. 障害者支援室には1台のコンピュータにアラビア語の音声読み上げソフトが搭載さ

れたが、そのコンピュータが壊れたまま 2 年間経ってしまった上、当時 60 名もあつた視覚障害学生に対して 1 台しかなかったので、ほとんど実用性に欠けるものであつた。

3. 障害者支援室は図書館に附属されたことによって、障害学生の会の改善要求などが無視されるようになった。
4. 障害者支援室は狭く、在籍している学生の 4 分の 1 も入れない状況である。
5. 障害学生の会が要求したアラビア語音声読み上げソフト搭載のパソコン 20 台の提供が実現する見込みがなくなった。
6. 卒業生に対して、大学側が就職の支援を行う仕組みが存在しない。

以上の問題が取り上げられ、その後、卒業生の会の取り組みについての報告を受けた。それをまとめると以下の点が上げられる。



1. 卒業生の就職支援
2. 在学生に対して、情報教育の整備
3. 大学に対して、卒業生に対するフォローアップを要求する。
4. 卒業生と在学生の交流を促進する。
5. 肢体不自由者のために開発された 3 輪自動車の無償提供を迫及する。

3. CAPEDS との協力について

執行部と話し合った上で CAPEDS に期待することは以下の点である。

1. 新しい障害者支援室の整備において資金面や、技術面で協力を要請
2. ハルツーム大学で行うプロジェクトのパートナーになること。

所感：

ミーティング終了後に感じたことは以下のとおりである。

まず、CAPEDS が行おうとしているハルツーム大学での情報教育プロジェクトの最たるパートナーはおそらくこの卒業生の会ではないかという印象を受けた。

卒業生の会を通じての活動展開は、直接大学とやり取りをするよりも効果的である。それは、当事者と直接議論し、障害学生のニーズを最優先にできるからである。さらに、大学という窓口を通すと、それに伴う事務的な手続きの手間が大きすぎるのではと危惧している。

問題点：

CAPEDS がハルツーム大学で行おうとしている情報教育プロジェクトに必要な予算は約400万円に相当する。果たして、こういった経験を持たない卒業生の会にこのプロジェクト運営を任せられることができるかが非常に不安である。



==== ハルツーム州障害児中核支援校の教師との意見交換会 ====

作成者：モハメド・オマル・アブディン

説明

中核支援校とは、ハルツーム州の教育省が指定した 7 つの小学校のことをさす。これらの学校の主な役割はそれぞれの地域の障害児を受け入れ、障害に応じて必要な教育を提供し、4 年次から、障害児を最寄りの小学校を戻すというものだ。

ハルツーム州の教育省はそれぞれの学校に障害児教育を担当する教師を配属し、プロジェクトの実行の段階になっている。今回の意見交換会では、3 人の教師に来ていただいた。この意見交換会で以下の議題について議論を交わした。

1. 教育省の方針の評価
2. それぞれの学校の状況
3. これからの見通し
4. CAPEDS に期待すること

1. 教育省の方針の評価

3 人の教師に来ていただいたが、3 人とも全盲の教師である。中核支援校が考えられたとき、どうも視覚障害児に対する教育が主なものであったと 3 人が口を揃えた。

そこで、3 人と教育省が作ろうとしているモデルについて話し合った。教育省は各支援校でひとつのクラスを設け、その地域の障害児をそのクラスに集め、1 から 3 年までの間、点字教育を行いながら、ほかの生徒と同じ授業を受けられるように徐々に慣らしていくものだ。

この方針に対し、3 人の考えは二つに分かれた。まず、H さん（30 歳の全盲の男性教師）が賛成の立場をとった。ただ、これを実行するのに、しっかりした準備と生徒たちを学校まで送迎できるスクールバスが必要になると話した。

この意見に対し、同じ地区に配属されている I さんと E さん（全盲、20 代後半と思われる女性教師 2 名）がこのモデルの批判的立場をとった。

その理由として以下のようなものがあげられる。

1. 彼女たちが配属されている地区はハルツームの中でも最も大きな地区であり、約 256 の小学校がある。もし、ひとつのクラスに障害児を受け入れる形にすると、そのクラスにすべての対象生徒が入りきれない。
2. 彼女たちが働いている地域は広すぎて、通学困難な生徒が出てくる。

その代わり彼女たちは以下のモデルを提案している。

その地区内の小学校を回り、教師たちにたいして障害児に対する心理的サポートのノウハウを教える。地区内のそれぞれの学校から教師を 1 名選定し、それらに対して、ワークショップを行う。

2. それぞれの学校の状況

まず 3 人の考えが一致している点について述べる。各地区の教育委員会はこの中核支援校に対して非協力的態度をとっている。その理由として、教育省と地区の教育委員会のコーディネーションがうまくいっていないことと、支援校でのクラスを作るにあたって、必要な費用の負担をめぐって亀裂が生じていることがあげられる。

この背景には、政府が打ち出している地方分権化によって、各地区がその地区内の教育、保健などといった公共サービスを独自の財源で賄わなければならないという厳しい状況があると考えられる。各地区の教育委員会にとっては、中核支援校は優先順位の上位にならないのである。

そのため、H さんが配属されている地区での中核支援校でのクラスがまだ始まっていない。支援校になってもいいという小学校が手を上げてくれたのに対し、教育委員会はまったく具体的なステップを進めておらず、H さんは配属されてからもう 2 年経とうとしているのだが、彼の訴えには教育委員会が聞く耳を持たないそうである。

I さんと E さんに関しても、状況が似ているが、そもそも彼女たちはひとつのクラスに障害児を集めることに批判的な立場をとっていたので、各小学校をできる限りまわって、教師や生徒たちに対して、障害児が必要なサポートについて指導したりすることが主な職務となっているそうである。ただ、上述したが、この地区はたいへん広く、交通手段がない限り、遠方の学校まで足を運ぶことができない。それに、アウェアネスレージングができたとしても、障害をもった生徒たちに対して、直接的に必要な点字技術などについて教える余裕がないそうである。

3. これからの見通し

以上述べたように、ハルツーム州の教育省は中核支援校プロジェクトを打ち出したにもかかわらず、2 年間たってもこれが実行に移されていないのである。各地区の教育委員会の理解を得られないことには、このようなプロジェクトが起動に乗ることが困難だと思われる。さらに、教育省と教育委員会の責任が明確にする必要があるとも考える。双方の間のコミュニケーションが十分にとられ、ひとつのチームとして動かない限り、こういったプロジェクトは白紙で終わってしまう可能性がある。最後に最も問題となるのが、教育省の特殊教育係が弱い部署であり、この強化も大きな課題と思われる。

4. CAPEDS に期待すること

この悲惨な状況を聞かされた私、3人の教師に尋ねてみた。CAPEDS にどういうことを期待しているのか？

解答は以下のとおりである。ひとつの支援校でのクラスが起動に乗るまで支援してもらえないかとのことだった。こういったプロジェクトが組まれているのにもかかわらず、実行されず時間が過ぎていくと、やはり廃止される可能性さえ出てくるだろうという意見も聞かされた。

そこで、私も同じ意見をもったのだが、はたして今の CAPEDS にこのプロジェクトを支援する財源があるかは不安だったので、東京へ話をもっていくことにした。

この意見交換会から感じたこと

以前と比べて、障害者教育の問題は教育省でも取り上げられるようになった。特殊教育係ができたことは大きな進歩である。しかし、教育省の中でも、特殊教育係がまだまだ「係り」というレベルでしかなく、部門というところまでいかない。そのため、割り当てられる職員数や予算も少なく、効果的なプロジェクトを立案するものの、それを実行に移すための資金がない状況である。

そのため、CAPEDS の基礎教育支援事業として、ひとつの中核支援校のクラス公開を目指してもよいのではないかと思う。ただ、この場合、以下のことを留意する必要がある。

1. 1年限定限り支援を行う。
2. CAPEDS が行った支援がきちんとプロジェクトに使われる保障を得ること。

そこで問題となるのが以下のようなものである。

1. 中核支援校は教育省が進めているプロジェクトなので、支援を行う場合は教育省を通す必要がある。ただ、上述したが、それがきちんとプロジェクトに使われるかどうかは不安である。
2. 支援することで、教育省もこのプロジェクトに予算を充てることを断念する可能性がある。
3. 1年限定で支援した後の支援体制がうまくいくかどうかは不安である。

今後現地と連絡しつつ、CAPEDS がこのプロジェクトを支援するかどうかは決めていきたい。

＝ スーダンにおけるブラインドサッカー普及プロジェクト ＝

プロジェクト名：ブラインドサッカー普及プロジェクト

実施場所：スーダン共和国ハルツーム州

実施期間：2007年9月1日から2007年9月22日

実施目的：1. スーダンの視覚障害者にブラインドサッカーを紹介し、希望する視覚障害者と障害者以外の人々を対象に講習会を行う。
2. スーダンのサッカー協会およびスーダンフットボールアカデミーの関係者にブラインドサッカーを紹介し、協力を要請する。

【プロジェクト概要】

フットボールアカデミーの関係者とミーティングを行い、ブラインドサッカーに関するセミナー、あるいは講演会を主催していただけるよう要請し、それが成功すれば講演会を実施し、その後、講習会を開く。さらに、スーダン唯一の盲学校であるエルヌール盲学校において、講習会、または説明会を検討。

【実施内容】

I. エルヌール盲学校において、ブラインドサッカーの説明会の実施

9月9日（日）に、エルヌール盲学校において、ブラインドサッカーの説明会を行った。エルヌール盲学校の窓口になってくれたアジャミー先生との打ち合わせにおいては、説明会を行った後、簡単な講習会も実施することを話した。

当日の朝、先生から連絡が入り、スポーツ担当の先生が身内に不幸があり説明会に来られないため講習会を実施するのを今度にしてくれませんかという報告を受けた。そのため予定していた講習会をキャンセルし、説明会のみを実施することになった。

説明会は放課後に行われ、約25名の小学生が出席していた。クラスがばらばらではあったが、クラス別の出席人数に関する詳細なデータは不明である。

【説明会の内容】

まず、ブラインドサッカーのボールをまわし、全員に触ってもらった。その後、「サッカーが好きな人は手を挙げてください」とこちらから頼むと、全員が熱狂的に手を挙げてくれた。そこで、ブラインドサッカーとはどういうスポーツであるか、どこで始まり、現在どういう大会があるかについて話した。最後にルール説明をし、質疑応答に入った。対象は小学生なので難しい質問は出ないだろうと思ったが、意外とみんなサッカーに詳しく、レベルの高い質問が次々と出てきた。その一部を紹介すると、「ブラインドサッカーでは、オフサイドがあるのか？」「地面は土なのか？」「はだしでやるのか？」「周りがうるさかっ

たらどうするのか?」「交代要員はどうなっているのか?」「ファールのとり方はどうなっているのか?」などの質問が出た。生徒たちのサッカーへの情熱が伝わる質疑応答コーナーであった。その後、盲学校に3個のブラインドサッカーボールを寄付し、説明会は約1時間で終了した。

【成果】

1. エルヌール盲学校の生徒たちにブラインドサッカーを紹介できた。
2. 生徒たちの質疑応答を通じて、生徒たちがブラインドサッカーをイメージできたことを確認できた。
3. 説明会が終わると、生徒たちから素直に「ブラインドサッカーをやりたい」という発言を聞くことができた。
4. エルヌール盲学校でのブラインドサッカーの持続的な活動を保障するため、第一フェーズとして3個のボールを寄付した。

【課題】

1. 講習会ができなかったこと。
2. 体育担当の先生にブラインドサッカーの説明をする機会がなかったこと。
3. 学校の時間内に体育の時間が組み込まれていないエルヌール盲学校の状況に失望しつつも、改善を訴えられなかったこと。

【プロジェクト後】

今回エルヌール盲学校での説明会を実施して一番感じたことは、生徒たちの「ブラインドサッカーをやりたい」という気持ちであった。しかし、上述したように、エルヌール盲学校には体育の時間も体育の先生もいない。運動は週2回行われることになっているが、それもつい最近始まったプロジェクトで、担当者はスポーツをやっていたが専門性はなく、ボランティアな形でやっているエルヌール盲学校職員のパートナーである。そのため、彼が欠席をしても誰も文句が言えない状況だという。ブラインドサッカー説明会の当日に彼が休んだことを考えると、これから運動の時間が継続的に行われていくことは非常に厳しいと考えられる。

しかし私が盲学校の卒業生に聞いた情報によると、寮に入っている生徒たちが毎日夕方、ペットボトルに石ころを入れてサッカーをやっていたという。そこから生徒たちにサッカーをやりたい気持ちがあるということがわかる。今後運動できる体制さえ整えば、ブラインドサッカーは短時間で普及していくのではないかという印象を受けた。

II. ブラインドフットボールアカデミー

エルヌール盲学校での説明会の前日に、スーダンサッカー協会附属のフットボールアカ

デミーの事務局長とミーティングを行った。

【内容】

実施日：2007年9月8日<土>

場所：スーダンフットボールアカデミー

このミーティングの主な目的は、スーダンサッカーの顔ともいえるフットボールアカデミーの関係者にブラインドサッカーについて知ってもらい、技術的、金銭的サポートを要請することであった。イッサッディーン事務局長とは約1時間のミーティングを行い、ブラインドサッカーの生い立ちやルールについて説明し、北岡さんというカメラマンに作成していただいた紹介ビデオを見せ、協力を要請した。事務局長がブラインドサッカーに大きな関心を示してくれたことは、このミーティングの大きな収穫であった。さらに、私がお願いしようと考えていた講演会の実施を先方から申し出てくれたことは、非常に良かったと思う。



【講演会】

ミーティングでブラインドサッカーに関する講演会をすることが決定し、講演会は3日後の9月11日に予定された。事務局長が場所の提供とマスコミへの呼びかけをやってくださるとのことであった。講演会の当日、会場に予定より25分前に到着したが、受付には私が招待した一人の日本人留学生しかいなかった。不安を隠せずにいた私に対し、その留学生は「だいじょうぶだよ。みんなスーダン時間くるんだ。」と励ましてくれた。しかし、開始時間5分前になっても誰も現れない。事務局長のオフィスに行くと、事務局長はゆったりしたムードで「どうぞどうぞ」とお茶まで入れてくれた。



残念なことには、事務局長はマスコミに呼びかけることを忘れたようだ。しかし、スーダンパラリンピック協会の副会長や旧スーダン代表の選手、サッカー協会の事務局長補佐、サッカーのテレビ実況放送のアナウンサー、スポーツ省のフットサル担当者などには声をかけてくれた。幸いにこれらの方々には講演会に出席していただき、8名の視覚障害者と合わせて約20名が出席してくれた。

残念なことには、事務局長はマスコミに呼びかけることを忘れたようだ。しかし、スーダンパラリンピック協会の副会長や旧スーダン代表の選手、サッカー協会の事務局長補佐、サッカーのテレビ実況放送のアナウンサー、スポーツ省のフットサル担当者などには声をかけてくれた。幸いにこれらの方々には講演会に出席していただき、8名の視覚障害者と合わせて約20名が出席してくれた。

【講演会の内容】

まずブラインドサッカーの生い立ちから始まってルール説明などにも触れ、プロジェクターを PC につないでプロモーションのビデオを見せた。その後 CAPEDES の説明をし、ブラインドサッカーの普及をサポートしていただけるよう要請した。

その後の質疑応答では、ブラインドサッカーの組織化と直属機関が問題となった。最後に私から旧スーダン代表のザキさんにビデオを見てのご感想をお願いしたが、「ブラインドサッカーはフィジカルと個人技は最も大事な気がする」という非常に分析的な回答を頂いた。おそらくプロモーションビデオにおいては、ブラジルの得点シーンが目立ったためにそういう発言をされたのではないかと思う。

最後に、スポーツ省のフットサル担当者から「出来ることはやるので、どしどし頼んで下さい。会場を押さえることなど、いつでもいってください。」との前向きなお返事をいただいた。



Ⅲ. ブラインドサッカー普及会

11日に行った普及会の翌日から9月12日、14日、19日と、のべ3回の普及講習会を実施した。会場は、スーダンバスケットボール協会の屋外グラウンドで、3回とも夕方に行った。

【内容】

12日

時間：17時～20時

出席人数：視覚障害者12名、晴眼者3名

内容：ジョギング、基礎練習、1対1、ゲーム形式

14日

時間：その日からイスラム教徒が断食をするラマダンに入り、練習を20時から21時半までに変更した。

出席人数：視覚障害者12名、晴眼者5名

内容：ジョギング、基礎練習1対1、ゲーム形式

19日

時間：20時～21時半

出席人数：視覚障害者 11 名、晴眼者 4 名

内容：ジョギング、基礎練習、1 対 1、ゲーム形式

【講習会の成果】

1. フットサルが大変盛んになり会場を押さえることが難しいラマダンの時期に、3 回の講習会を実施できたこと。
2. のべ 12 人の視覚障害者と 6 名の晴眼者に対して講習会を開けたこと。
3. 練習を重ねるごとに、選手が上達していくことがわかったこと。
4. スーダン初のチームの基盤づくりができ始めたこと。

【課題】

1. スーダンでは、日本のようにフットサル場がそれほど多くない。学校の体育館という概念もなく、しっかりとしたフットサル場は 3 つほどであるため、これからはどのようにして会場を押さえるかが大きな課題となること。
2. 講習会に出席した視覚障害者の 80%が運動不足で、ジョギングを始めて 5 分でやめてしまう人もいた。そのわりにゲーム形式になるとみんな出たがるため、やはり厳しい基礎練習つんでいかないとすぐに上手にはならないと思う。講習会において楽しい基礎練習を思いつかなかったことは私自身の大きな反省点である。

【プロジェクト全体の評価】

今回のプロジェクトを実施し、成功した点や失敗した点がそれぞれあるのだが、キックオフとしてはまずまずの滑り出しになったと思う。

スーダンサッカーのトップレベルの関係者と接触できたこと、25 名の盲学校の生徒を対象に説明会を開くことができたこと、12 人の視覚障害者と 6 人の晴眼者に対して 3 回の普及講習会を実施できたことは、今後のスーダンのブラインドサッカーの基盤となる活動であったと思う。

一方、ブラインドサッカーの組織化といった点に関して、ブラインドサッカー協会を作るべきか、パラリンピック協会の活動のひとつとして扱われるべきかはいまだ解決できていない問題である。組織作りはある活動を持続的に普及していくのに必要不可欠である。今後、こういった問題がクリアーになれば、もっともっとブラインドサッカーの普及ができるのではないだろうか。

